

# 計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

## 会報 2008-9

発行日：平成20年9月30日

発行元：計画・交通研究会

〒102-0083

東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F

TEL=03-3265-1774 FAX=03-3221-5489

E-Mail= jimukyoku@keikaku-kotsu.org

Homepage=http://www.keikaku-kotsu.org/

### 目次

Opinion .....1-2  
角栄と龍馬：intellectual innocence

News Letters .....2-5  
事業報告・活動報告

Backyard.....6  
事務局通信

## □ Opinion 角栄と龍馬：intellectual innocence 羽藤英二

小学生の夏休みの宿題で田中角栄の研究というのをした覚えがある。田中角栄はこんなたとえ話をしたらしい、一本の川が流れている。上流と下流に町がある。二つの町の代表が橋を架けてくれと言ってきた。そのときどうするか。

- ①調査をしてより必要性の高い方に橋を架ける。
- ②そのうちにと言い続けて何もしない。
- ③無駄だと思っけていても二つに橋を架ける。

田中は3番目の案を選んだ。費用便益分析をすれば結果はどう出たのだろうか。貧しさの中から出て、「土方というが、土方はいちばんでかい芸術家だ。パナマ運河で太平洋と大西洋をつないだり、スエズ運河で地中海とインド洋を結んだのもみな土方だ。土方は地球の芸術家だ」という田中の言葉には個人の主観に訴えかける独特の説得力があった。日本人の多くは田中が大好きだったし当時の私もまた皮膚感覚に溢れる田中の言葉に惹かれた。

日本国中に道路を造り、海を生み建てて国土を造成し、産業を振興させ、庶民に豊かな暮らしをさせたいというのが、田中の政治家としての理念と政策である。僅か34歳の頃、「道路整備費の財源等に関する臨時措置法」で、ガソリン税を

道路建設の財源にするというおよそ当時としては考えられない常識破りの法案を発案し通した。苦労人の田中が、自分の体験のなかから、幸せとは何かということを考え、そこから育まれた気宇壮大な夢であり、そこに日本の「社会システム」が見事に結びついた。

マリウス・B・ジャンセン「坂本龍馬と明治維新」を読んでいると、明治維新の頃の志士の精神の発展段階におもしろい記述があった。ジャンセンによれば、多くの志士たちが三段階の精神発展を経ることで、大いなる明治維新はなったとのこと。

精神的発展の第一段階として、武力の醸成がある。坂本龍馬であれば、千葉道場で武力を磨くという段階である。田舎から江戸に出てきた坂本が只管剣の道を磨き、山内容堂が見守る武道会で優勝を修めることで、彼の中が天下に知れ渡る。ここまでが第一段階である。

第二段階は原理主義的に単純な宗教的イデオロギー（攘夷論）の習得である。自己の道徳的優位性に対する陶醉に近い確信をもって、知的無邪気さ(intellectual innocence)で複雑な問題に単純な解決(simple solutions to complex problem)を迫る。というものである。

最終段階は、悲憤慷慨(ひふんこうがい)の

常道主義と蒙昧主義から合理的具体的な対外態度への脱化である。勝海舟の説得と出会いの幸運と経験が彼の尊大と衝動主義、英雄主義を戒め、複合的で複雑な解決法の模索をもたらした。大いなる明治維新はここに成ったとえよう。

翻って田中の手法論をこの精神発展理論に当てはめてみよう。第一段階では土木屋としての田中、第二段階は土木が世界を救うという考え方でブルドーザーのように法案成立に賭けて突き進んだ田中はこれに当たるかもしれない。しかし、こうした精神的発展段階は何も田中に限った話ではない。道路不要論や単一施策の遂行が全ての問題を解決するといった単純な論説を振りかざす人は、案外自分の周りにも多いように思う。

日露戦争終了後、小村寿太郎にバイカル湖まで取るべしと論じたのは朝日新聞である。今となっては呆れる他ないが、カタルシス溢れる

こうした言説は確かにひとつの批評としてはおもしろい。日本という国はいかにもこうした「空気」で動きやすい国であることも間違いない。しかし改めて「然し」と思わぬものだろうか、と思う。

土木や計画を巡る近年の論説を聞くとき、知的無邪気さから複雑な問題に単純な解決を迫る姿は醜悪だと思う。英国の非原理主義、米国の合理的思考と多様性を目の前にしたとき、日本人としての豊かな精神性の発展を願わずにいられない。しかし不思議なことに、今でも田中の言葉には惹かれないわけではない。なぜだろうか。彼が自分の手足を動かして発破を仕掛けた山奥のトンネルの工事現場だったり、絶望的な雪が降りしきる故郷の村で彼自身が皮膚で感じた生々しさが、彼の単純な言葉に残っていたせいだろうか。

(東京大学大学院都市工学専攻 准教授)

## □ News Letters

## 事業報告・活動報告 □

### ■定例研究会報告

●日時：平成20年9月10日(水) 17:00 —

●場所：東京工業大学大岡山キャンパス

●講師と講演題目

Michal Bell教授 (Center for Transport Studies, Imperial College London)

“Shared Spaces: Travel Demand Unmanaged”

●司会：東京工業大学 准教授 福田大輔 先生

●講演概要：

ベル教授は、同校交通センター教授を長らくお務めになられ、これまでに、道路ネットワーク信頼性解析、港湾オペレーション技術、交通モニタリング、トラフィックシミュレーション、交通需要マネジメント、高齢者や障害者の交通、シティロジスティクス等、数多くの優れた研究をなさっている

(<http://www.cts.cv.ic.ac.uk/html/Staff/staffDetails.asp?id=MGHB>)。

今回の講演では、新しい交通需要の(非)マネジメントの考え方である“シェアード・スペース”(<http://www.shared-space.org/>)の今後について、欧州各国の実例やベル教授のご研究の成果を一部交えてご紹介頂いた。具体的には、都市内における自動車・歩行者の混合交通流を対象として、非分離化(Desegregation)による空間共有型の道路空間設計事例の紹介、並びに、交通マイクロシミュレーションを用いた分析結果の例をご発表頂いた。これまで、多くの都市では、自動車と歩行者の空間を明確に区別する分離化(Segregation)が進められてきた。これに対し、近年、信号や標識等の交通施設を取り払い、自動車と歩行者が空間を共有する非分離化の動きが欧州を中心に活発になりつつある。イギリスの各都市(Monderman, Brighton, Newcastle, London)における非分離化の適用例を中心に写真を用いた紹介がなされ、非分離化により、自動車の速度低下、景観改善や歩行者の健康増進

等の利点がある一方で、障害者や子供の安全面等の問題が増大する可能性があることが紹介された。また、歩行者と自動車の両者が互いの速度に与える影響や歩行者の停止を考慮した交通マイクロシミュレーションを用いた非分離化の影響分析結果の例も紹介された。結論として、空間のデザインの検討や適用の限界を知る必要があると共に、研究者の観点からは、シェアード・スペースにおける交通流解析の理論体系構築を行うことが重要であることを挙げられていた。

講演会の司会は、ベル教授の元で博士論文をとりまとめ、現在は東京工業大学で客員准教授を勤めているJan-Dirk Schmoecker氏が担当した。また、計画交通研究会会長の森地先生を

はじめとして大学内外から約40名の参加者があり、講演後の質疑・ディスカッションも極めて活発であった。

文責：東京工業大学 福田大輔・柳沼秀樹



## ■2008年7月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅷ講・第4回)

●日時：平成20年7月23日(水)17:00~20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

特別講義(1) 旅人が見る“いい国”とは

②旅と観光研究室 溝口 周道 氏

報告(2) 季節：伝統と演出：夏の「涼し」

●参加者：18名(うち計交研関係8名)

[講義概要]

### ◆特別講義1◆(鈴木忠義)

○旅人が見る“いい国”とは

川場村に1本の美しい道(歩く道)を造ろうということで、関係者で協議を勧めている。その基本的な考え方について概説した。

はじめに

旅人が見る“いい国”とは、道路を走ったり歩いた時の技術と美しさの印象である場合が多い。それらは「用・強・美」の三位一体であり、この場合の美は移動である。とすれば、“道はその国のショールーム”である。これが魅力となって人々が訪れ、経済効果は後からついてくる。

#### 1. 歩く速度、庭スケールの道づくり

人は情報の80%を視覚から得て移動する。

人の視点の変化により、景観が変化する。視点の変化は、「位置の変化」と「その速度」である。川場村でのケーススタディは、歩く速度、庭スケールの道づくりである。

#### 2. 技術の各論を追求して整理

「みんなでつくる美しい道」という本は、造園技術のカタログであった。川場村の道づくりでは、どうやったら実現するかという技術の各論を追求し整理する。生き物材料を使っているため完成はしない。このため“みんなでつくる”ということが大切である。

#### 3. 基本の主題は、季節感

旬がいつもその時に横溢している、年間を通して常に季節を感じられる道としたい。その観点は以下のようなものである。

①日本人の自然感(万葉以来)

②都市の環境(近代化)の不備

③田園とは何か、そのコンセプト

#### 4. 歩行を前提とした視点と“用・強・美+聖”

川場村の歩く道づくりは、以下の項目を具体化し、その原理・理論についても解説する。

①路線の選定、その理由

②興味地点の選定、その理由

③その“つなぎ”－理論は文芸・芸術の原理に学ぶ(例えば音楽：道路の美におけるリズム、

ハーモニー、メロディとは何か)

- ④民衆の理解を得るための表現
- ⑤施工段階における材料(生物)の“学と術”

### ◆報告(フォーラム当て2008)・2◆(溝口周道)

#### ○季節：伝統と演出：夏の「涼し」

季節の美は観光の重要な要素であり、各地で花による観光地づくりが行われている。しかし、「花はきれいだけど」何かもの足りない、ちょっとがっかりするという場所は少なくない。その要因は、日本人にとって季節は身近で当たり前なもので、安易に扱われてしまいがちで、結果として豊かな観光体験を提供できずに終わるためと考えられる。このため、季節を捉え直す必要があり、その一つとして伝統文化の中から学ぶことが重要である。わが国には、雪月花、花紅葉、花鳥風月など、季節の自然の美を象徴する表現が

豊かであり、そのことが示唆する日本人の季節の捉え方・楽しみ方の固有性に注目する必要がある。

報告では、前半で季節の美を楽しむ伝統をいくつかの視点から示し、後半は夏の「涼し」を取り上げて楽しみ方と演出の特徴を示した。

[報告目次]

1. 季節の美を楽しむ伝統
  - 1) 日本人の季節感；西洋との違い
  - 2) 四季を楽しむ・移ろいを楽しむ
  - 3) 春の中の移ろい
  - 4) まなざし：眺めと興味対象(個)
2. 夏の「涼し」：「夏はいかにも涼しきやう」の伝統と演出
  - 1) 美意識の対象としての「涼し」
  - 2) 享楽の場としての「涼み」
  - 3) 「涼し」の演出の特徴

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

## ■2008年8月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅷ講・第5回)

- 日時：平成20年8月6日(水)17:00~20:00
- 場所：計画・交通研究会会議室
- 講師・演題
  - ①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生  
特別講義(2) (株)世田谷川場ふるさと公社の30年(1979~2009) その実践を辿る
  - ②(財)日本交通公社 研究員 渡邊智彦 氏  
報告(3) ハワイ大学の観光人材育成プログラム
- 参加者：21名(うち計交研関係8名)

[講義概要]

### ◆特別講義2◆(鈴木忠義)

世田谷区の区民健康村は、区議会で正式に承認されてから来年で30年となり、その足跡の出版が計画されている。ものが出来るプロセスを十分に説明し、なぜ出来、なぜ続いてきたかを示した役立つ本にしたいと考えており、その構成について概説した。

第1章は「この事業の成果」とし、この成果がどのようにして実現し、持続されてきているかを第2章以降で説明する構成としたい。

第2章は「構想への思索」で、「ふるさと村」という

ビジョンがどのように生まれ、受け入れられたかを示す。図のイラストは1979年に私が区に示した構想図であり、これが区長に受け入れられたことが始まりである。

第2章からの各章では、事業の主要事項とともに、その時代背景となる主要事項についても概説した年表を付けたい。

図 ふるさと村構想(絵：大橋清二)



用地選定、予算化、設計、区の企画部と教育委員会の協議と重ね、株式会社の設立と黒字運営など、賛成・反対両者の状況も盛り込みながら、今後に役立つまとめとしたい。

〔目次構成案〕

1. この事業の成果
2. 構想への思索  
思想 価値と考え方  
発想 人間の生きがいと健康  
構想 ふるさと村
3. 構想計画  
プロジェクトチームの結成／その報告書／  
用地の選定条件
4. 基本計画（計画書）
5. 実施計画
6. 運用計画  
(1) 社会実験／(2) 重ねの理論／(3) 三主体／  
(4) 用・強・美+聖／(5) 株式会社／(6) 人材  
育成／(7) 交流事業／(8) 市場立地  
(2～6は年表と主要事項を整理する。)

◆報告(フォーラム当て2008)・3◆(渡邊智彦)  
○ハワイ大学の観光人材育成プログラム「EDIT」

ハワイ大学では、観光人材の育成を目的とした短期研修「Executive Development Institute for Tourism」を毎年開催しており、2008年度(30回目)は7月7日～18日の日程で行われ、主にアジア・太平洋地域の国々の政府観光局や民間などから私を含めて22名(12カ国)が参加した。

この研修の概要、ハワイの観光事情とともに、各国の参加者との交流により感じられた観光への熱意、日本との違い、今後の課題などを報告した。

〔報告目次〕

1. EDITとは
2. ハワイの観光事情
3. 所感(アジア・太平洋地域における日本のプレゼンス／ハワイの魅力／日本の可能性／観光の捉え方の違い／国・地方・民間の役割分担の難しさ／ビジネス旅行とMICEの重要性等)

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

## ■アジア交通学会の活動

当研究会と支援関係にある、アジア交通学会(Eastern Asia Society for Transportation Studies)の本年の理事会は、マレーシア学会の要請を受け、去る8月11日マレーシアのジョ

ホールバルで開催され、14カ国18人の理事含め関係者31人の参加により、さまざまな事項につき打ち合わされました。その中で、本年1月に設立されたモンゴルの学会(Mongolian Transportation Research Society)が15番目の加盟国学会として承認されました。



■会議室等の御利用について

当研究会の会議室、応接室をご利用下さい。

定例研究会や個別研究会の開催時以外は部屋が空いています。会員の皆様はお気軽にご利用下さい。個別研究会等で会議室を御利用になる場合は、取りあえずお電話を下さい。

会議用にはOHP、スライド (Kodak)、液晶プロジェクター (APTi) が有ります。

個別に利用できるデスクがあります。貸し出し用ノート型パソコン (IBM Think Pad)、FAX、電話、コピー、E-mailもご利用いただけます。

なお、会議室は現在利用率が非常に低い状況にあります。どうぞ、お気軽に御利用ください。

■個別懇談会のお申し込み

会員各位個別の研究やプロジェクト等につきまして、当会のフェロー会員・個人会員 (地域的にも研究部門の面でも多彩な教授・助教授がおられます。既送の会員名簿を御参照下さい) が個別に御相談・懇談に応じます。ご希望により日時を調整しますので、事務局まで遠慮なくご相談下さい。出来れば具体的な研究課題・プロジェクト内容と、希望されるフェロー会員・個人会員のお名前をご連絡下さい。

■原稿の募集

会報に掲載する下記の原稿を募集します。

- ・ **Publication/Documents** : 刊行物・文献資料。
- ・ **Announcement** : 研究会・催事の御案内  
会員による講演会等の御案内も随時掲載します。  
日時・会場・事務局等を明記願います。
- ・ **Report** : 報告  
海外研修報告、国際会議参加報告等

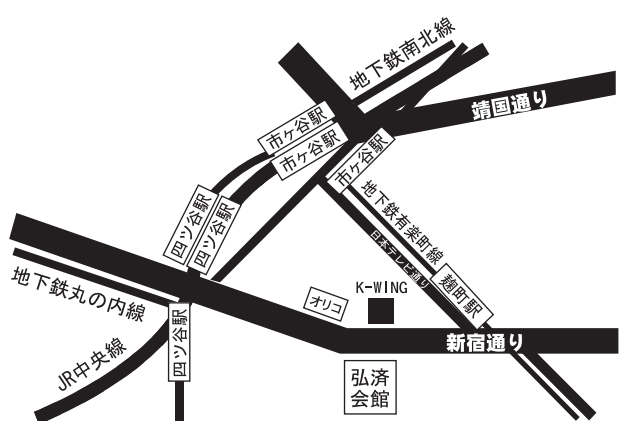
●原稿執筆上のご注意

- ①原稿のテキストファイルを電子メール (推奨。本文挿入または添付ファイル) あるいは3.5インチのフロッピーディスクでお送り下さい。ワードプロセッサを使用される場合は、MS-Word形式もしくは一太郎形式で文書ファイルを保存して下さいようお願いいたします。
- ②編集の都合上、400字を1単位としてその整数倍 (上限4単位=1ページ分: 表題・図表を含む) になるように調整して下さい。2ページ以上に及ぶ場合は御相談下さい。
- ③写真を使用される場合は、プリントされたものを郵送願います。
- ④締め切りは偶数月の15日 (必着) です。

計画・交通研究会

会長	森地 茂
副会長	石田 東生
副会長	家田 仁
副会長	屋井 鉄夫
事務局長	水野 高信
会報編集委員長	中井 祐

〒102-0083  
東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F  
TEL=03-3265-1774  
FAX=03-3221-5489  
Homepage =  
<http://www.keikaku-kotsu.org/>



計画・交通研究会案内図

交通

JR中央線四谷駅麹町口から徒歩6分/地下鉄丸の内線四谷駅徒歩6分/南北線四谷駅徒歩7分/有楽町線麹町駅4番出口より4分  
弘済会館前の大きなビル (オリコ) の右隣、1階にドラッグストア (クスリ) の入った小さなビル。